63. 道徳教育を考える

2015.9.1　遠藤清賢

義務教育の中に道徳の時間が組み込まれています。道徳は、人間が良く生きるために力を合わせ、心を合わせて生きるための決り事です。大切なことですが、しかし、この道徳教育は子どもたちを誤った方向に導いてしまう危険性もあるのです。ある個人や集団や国家が利己的な考えによってこれが道徳だと決めてしまうことです。このような歴史を私たちは知っています。多くの人を同じ方向に向かわせ、同じ考えを持たせ、ある特定の個人や集団、国家が何かの目的を達成するために目標を定め、それを道徳として利用したことが何度もありました。戦争を行う時はいつもそうです。また、一つの宗教を利用し個人の意志を操ってしまうこともあります。これらのことは現代でも世界の至る所で行われています。日本も例外ではありません。集団的自衛権など国が憲法を都合のいいように解釈し強引に法律を定めてしまうのはそれを提案する者に戦争をするという意図があるからです。ＩＳという集団がイスラム教を利用して暴力と抗争によって世界を変えようとすることも同じことです。

私たちには古代から引き継がれてきた規範が有ります。この規範は道徳として引き継がれてきました。これらは人間として生きるために伝統的な宗教によって引き継がれてきたのですが、現代社会はこの規範を捨てようとしています。人間は自らの心を制御する能力を持っていません。絶えず、利己的な欲望の中でしか生きて行けない心の弱い生き物なのです。この心の暴走を抑えているのは、私たちの眼には見えない大いなる力です。この力を神様と呼んでいます。神様によって人間は自らの心を制御してきました。現代はこの神様を抹殺しようとしているのです。人間の心が危険な状態になっているのです。

今の子どもたちの姿を見て道徳教育が必要であるということでその授業が行われていますが、私たち大人がしなければならないのは、先ず自らの罪(悪いところ)を把握し、罪人として自分自身を自覚しなければなりません。そして私たちにどのように生きなければならないのかを宗教を通して知り、それを規範として生きることができるかどうかなのです。大人が子どもたちに自らの生き方を示し、伝えなければなりません。私たち大人が、どんな生き方をしているのかが絶えず問われるのです。私たちが人間としての正しい生き方を子どもたちに伝えられるのかどうか、自らを検証することが必要です。人間としての真実を持ち合わせているのかどうかを自問自答し続けなければならないのです。子どもたちにより良い未来を期待するならば、宗教の大切さ、信仰を持つことの大切さを伝えることなのだと思います。

大人として子どもたちを指導するという立場ではなく、自らの罪を子どもたちに現わし、子どもたちと共に祈り、共に考え、人間の真実の生き方を探求することです。人間として如何に生きるべきなのかという真実に近づくしかないのです。自分以外の命の心をどのように想像できるのかということです。神様が私たちに望んでいる生き方とは、他の命を自分の命と同様に大切な命と捉える生き方です。そして、この生き方を実践することです。これを子どもたちに伝えることが求められているのです。

さつま芋サラダ

《材料(４人分)》

さつま芋　注１本、
人参 1/8 本、きゅうり 1/2 本、
スライスハム２枚、
マヨネーズ大さじ２

《作り方》

1. 材料は１㎝角くらいに切る。
2. さつま芋、人参は別々に茹で、キュウリは塩もみする。
3. ２の水気をきり、ハムと一緒にマヨネーズで和える。